

「内裏歌合」(建暦三年閏九月十九日)の校合

佐藤茂樹

「群書類従」の「内裏歌合」を底本として、国文学研究資料館に所蔵されている、以下に記す異本をもって、校合することとする。漢字と仮名の異同は原則として、採らないこととした。見せ消ちについては、「ハ」の中に示し、改めた文字には、その右横に・を付した。「左歌」と「左の歌」などは区別せず、異体字についても区別しなかった。不明な文字については、〈不明〉とした。また、頭注については、本文と同じ記述については、これを省略した。表記にあたっては、異同により、解釈上重要な問題が生じるところは底本に傍線を付し、その右横に異文を併記した。その他は本文の後に一括表記した。異本の表記の略記号は次の通り(順序は目録の記載順である)とする。

彰考館蔵本 (彰1)
彰考館蔵本 (彰2)

内閣文庫蔵本 (内)
賀茂別雷神社(三手文庫)蔵本 (賀)
山口図書館蔵本 (山)
河野信一記念蔵本 (河)
宮城図書館(伊達藩)蔵本 (宮)
中央大学図書館蔵本 (中)
白百合図書館蔵本 (白)
刈谷図書館蔵本 (刈)
神宮文庫蔵本 (神)
大阪女子大学図書館蔵本 (大)
宇部図書館(新井氏)蔵本 (宇)
佐賀図書館蔵本 (佐)
北海学園(北駕氏)蔵本 (北)
久松国男氏蔵本 (久)
熊本大学(北岡氏)蔵本 (熊)

一番 深山月

左勝^①さひし^②

女 房

月の色も山のはさむし^③みよしのふる里人や^④ころもうつ覽

右

おくの^⑤

雅經朝臣

しくれ行色こそしらねしからきの外山のおくも秋のよの月

其躰心詞^⑥

左歌其躰高其詞艶也。可レ謂「花実相兼」。右歌すかた又い
 うなるさまには侍を。しからきのとやまは。ことに深山と
 きこえずや侍らん。又おくといはんためならば。外山のこ
 とはさせる要なきにや侍らん。以レ左為レ勝。

①左勝——左(彰2)

②(彰1・内)

③ふる里——故郷(宮・中・白・刈・神・大・宇・佐・北・久)

古郷(熊)

④ころも——「心」ころ・歟も

⑤(彰1・彰2・宮・中・白・刈・神・大・宇・佐・北・久)

⑥(宮・中・白・刈・神・大・宇・佐・北・久)

⑦花実——実(宮・中・白・刈・神・大・宇・佐・北・久)

⑧いう——ゆう(宮・中・白・刈・神・大・宇・佐・北・久)

優(内・熊)

「い」ゆう(河)

⑨さま——「つ」さ・歟ま(河)

⑩を——「不明」(彰2)

⑪とやまは——外山まで(彰1・内)

外山(彰2)

外山そ(河・宮・中・白・刈・神・大・宇・佐
 ・北・久・熊)

⑫要——事(彰1・内)

二番

左勝

よを^②かねて^③大蔵卿^①

右

侍^④従^⑤「ことと」^⑥ともなふ^⑦うつらふ^⑧

しらかしの露をく山も道しあれば枝にも葉にも月を伴なふ

左上句愚意いとしも心え侍らねとも。すかたはいうに侍へ
 し。右しらかしの露をく山とつゝけたる。ふることなとも

侍らぬを。ことありかほにきこえ侍らは。そのことゝなく
 や。道あるみよの月かけ。山のおくまでくもりなかるへき

や。道あるみよの月かけ。山のおくまでくもりなかるへき

心を思けるに。こと葉のたらぬにそ侍へき。以_レ左為_レ勝。^⑬

①大藏卿——大藏卿有家(彰1・彰2・内)

有家(河)

有家卿 本大藏卿以下同(熊)

②(彰1・彰2・刈)

③(彰1・彰2)

④侍従——侍従定家(彰1・彰2・内)

定家(河)

定家卿 本侍従以下同じ(熊)

⑤(彰2)

⑥(賀)

⑦とも——と(彰1・彰2・内)

⑧いう——「い」ゆう(河)

優(内・宮・中・白・神・大・宇・佐・北・久・熊)

⑨ふること——こと(北)

ふること(熊)

⑩なとも——なむとも(彰1・彰2・内)

⑪侍らぬを——侍らぬは(彰2)

⑫侍らは——侍ら「す」は(河)

⑬ことゝ——こと(彰2)

⑭おくまで——おくまでも(河)

おくまで「も」(賀)

⑮くもり——もり(河)

⑯こと葉の——詞(彰1・内)

詞の(山・宮・中・白・神・大・宇・佐・北・久・熊)

三番

左持

從三位

あまのはらさゆる光をしもとゆふてる月影のかつらきの山^②

右

經通朝臣

なかめ侘ぬひと夜をたにもみよしのや故郷うとき山端の月^③

左しもとゆふかつらき山の中にてる月影とをけるにや。あ^⑤

たらしくきこえ侍らん。さゆる光をしもとゆふとそへたる^⑦

には侍めれと。俊頼朝臣歌に。てる月のたひねの床やしも^⑧

とゆふかつらき山の谷河の水。ちかく家隆朝臣。色かはる^⑨

いまや木のはのうへにをくしもとゆふへのかつらきの山。

又きのふけふもかやうの心きこえ侍しにや。この比しもと^⑪

ゆふかつらき山いたく耳なれて侍れと。右歌も又ことなる^⑫

事侍らねは。為_レ持。

①從三位——從三位家衡(彰1・彰2・内)

家衡朝臣 (河)

家衡卿 本従三位以下同じ (熊)

② ゆふ——いふ (内)

「い」ゆふ (河)

③ 故郷——古郷 (内・熊)

④ 山端——山の葉 (山)

⑤ 左——左の (彰1・彰2・内)

⑥ をけるにや——をける (彰1・彰2)

⑦ きこえ——聞 (不明) (宇)

⑧ 俊頼朝臣歌——俊頼朝臣の歌 (宮・中・白・刈・神・大・宇

・佐・北・久)

⑨ 谷河——谷川 (彰1・内・賀・山・河・宮・中・白・刈・神

・大・宇・佐・北・久・熊)

⑩ 家隆朝臣——家隆朝臣の (宮・中・白・神・大・宇・佐・久)

⑪ きのみ——昨日も (彰1・彰2・内)

⑫ 侍し——侍 (彰1・彰2)

⑬ 比——ナシ (河)

⑭ ゆふ——「い」ゆふ (河)

⑮ なれて侍れと——なれ (彰1・彰2・内)

四番

左勝

家隆朝臣

月影もすめはすみけり白雲のたえすたなひく峯のこからし^①

右 俊成卿女

鳥の音も木のはもしらぬみ山分て月はわすれす涙もるそて^②左右ともに。よろしくはみえ侍を。しら雲のたえすたなひ^③く山によせて。月影もすめはすみけりとをける心。誠にた^④くみにおもしろく侍れは。左勝と申へくや侍らん。^⑤

① 月影も——月影へ右横ニ「壬二中」トアリ (河)

② 鳥の音も——鳥のねもへ右横ニ「家集なし」トアリ (河)

③ わすれす——わすれぬ (彰1・彰2)

④ 侍を——侍れと (彰1・彰2・内)

⑤ をける——「を」おける (河)

⑥ 左勝——勝 (彰1・彰2・内・宮・中・白・刈・神・大・宇

・佐・北・久・熊)

五番

左勝

範宗朝臣

いふ^①

嵐ふくみ山の庵のひまをあらみ月をあるしとふ人もかな

右 為家

を^②

しら雲のかゝるみ山の月にたとへかし人の秋のおもひを

左下句いうに侍へし。右秋の月のひかりにむかひて。しら雲のかゝるといへる。事たかひてきこえ侍れは。以レ左為レ勝。

① (河)

② (彰1・彰2)

③ いう——優 (彰2・熊)

ゆう (宮・中・白・大・宇・久)

〔い〕 ゆう (河)

ゆ (不明) (神・佐・北)

④ かゝる——かゝるかゝる (久)

六番

左

君か千世を空にみやまの松のえの変らぬ月もいつとわき覺

右勝

光

家

さひしき

あをやきのかつらき山に雲消てなかり夜わたる月そ久しき

左歌君か代をといふとも。千世も八千世もきこえ侍なん物

を。このはしめの六文字すこしきゝなれすや侍らん。又松

かえ梅かえは。つねにかの字をそきゝなれて侍。花のえな

とはいひなれて侍へし。ふかき難にはあらず。右めつらし

きふしもみえ侍らず。又させるとかもなき程に。いさゝかまさり侍へくや。以レ右為レ勝。

① 行能——行能朝臣 (宮・中・白・刈・神・大・宇・佐・北・久)

② 千世——千代 (河・宮・中・白・神・大・宇・佐)

代 (刈・北)

③ えの——えた (彰1・内)

えたの (彰2)

④ わき覺——〔に〕わ敷きける (河)

⑤ (彰1・彰2・内)

⑥ 左歌——左 (宮・中・白・神・大・宇・佐・北・久・熊)

⑦ 千世——千代 (宮・中・白・刈・神・大・宇・佐・北・久)

⑧ 六文字——五文字 (宮・中・白・刈・神・大・宇・佐・北・久)

久

六〔文〕字・ (河)

⑨ 又——ナシ (彰1・彰2・内)

⑩ 梅かえ——ナシ (三・山)

⑪ 侍——侍るは (彰1・彰2・内)

⑫ など——なんと (彰1・彰2・内)

⑬ 侍らず——侍らぬ (山)

⑭ 程——はかり (彰1・彰2・内)

⑮以レ右為レ勝——ナシ（彰1・彰2・内）

七番 寒野虫

左勝

女^① 房

②浅ちふや床は草葉のきりくす鳴音もかるゝ野への初霜

右

雅經朝臣

きりくす鳴音もよはの初霜に野への浅茅や先かはるらん

④左の床は草葉とをきて。なく音もかるゝと侍。心^⑦ことはかのひとりぬるといへる本歌にはおほくまさりて。まことにありかた^⑩こそきこえ侍めれ。右もすかたことはゝいうなるさまにはへるを。ちか比露のぬき夜はの山風この比はたつたのにしき心してふけ。此歌もし作者見をよはす侍にても。今はめつらしからすみえ侍れは。以レ左為レ勝。

①女房——女房順徳院新拾（河）

②浅ちふ——あさちふへ右横ニ「新拾秋下」トアリ（河）

あさちふへ右横ニ「新拾」トアリ（宮・中・白

・刈・神・大・宇・佐・北・久）

③雅經朝臣——雅經（彰1・彰2・内）

④左の——左（彰1・彰2・内）

⑤と——不明（彰2）

⑥侍——いへる（河）

⑦「心ことはゝいへる」の一五字欠脱（河）

⑧本歌には——本歌に（彰1・彰2・内）

⑨まことに——誠（宮・中・白・刈・神・大・宇・佐・北・久

・熊）

⑩侍めれ——侍れ（彰1・彰2・内）

⑪ことはゝ——ことは（彰1・彰2）

⑫いう——優（彰1・彰2）

ゆう（内・宮・中・白・刈・神・大・宇・佐・北・

久）

〔い〕ゆう（河）

やさしく優（熊）

⑬なるさまに——に（彰1・彰2・内）

なるさ〔も〕まに（河）

⑭ちか比——ちかき比（彰2）

⑮たつた——たつ（白・刈・神・大・佐・北・久）

⑯もし——ナシ（彰1・彰2・内）

⑰をよはす——およはす（河）

⑱侍——ナシ（彰1・彰2・内）

⑲みえ——ナシ（彰1・彰2・内）

八番

左勝

大^① 蔵 卿

すたきこし野もせの虫よ秋たけて我たに残るしたの思ひを

右

侍^③ 従^⑥
かはる

ゆく秋のすゑのゝ木のはあさなくそむれは弱る虫の聲々

行秋のすゑのゝおもかけしほるらん。草葉の露霜をはをきて。木のはをしもいひたてたる。たかひて侍うへに。色といふもしもなくそめたるも。ことはりなく侍らん。これ^⑫たゝ尤風情つきて。白紙をのかるゝはかりのいたつらことにこそ侍めれ。以^⑭左為^⑭勝。

①大藏卿——大藏卿有家(内)

有家卿(熊)

②「今物語 かしかましのもせにすたく虫の音やわれたに物をいはてこそおもへ 此歌出所うつほ物語に見ゆ今左の歌は是をおもはれるか」ト頭注アリ(河)

③侍従——侍従定家(内)

定家卿(熊)

④ゆく秋の——ゆく秋のへ右横ニ「拾遺下」トアリ(河)

⑤すゑ——す「ゑ」そ(河)

⑥(熊)

⑦しも——ナシ(彰1・彰2・内)

⑧いひたてたる——いひたる(河)

⑨侍——侍るへき(彰1・彰2・内)

⑩もしも——もし(彰1・彰2・内)

⑪そめたるも——そめたる(彰1・彰2・内)

⑫これ——ナシ(彰1・彰2・内)

⑬尤——老の(彰1・彰2・内)

老(刈)

⑭以——ナシ(彰1・彰2・内)

九番

左持

従^① 三位

をのか秋をおしむか夜半のきりくす枯野の草の露に鳴也^④

右

經通朝臣

よはるか音に鳴かれぬ蜚をのかすむのゝ霜のふりはも

左はことなることなく。右はおもふところありけに侍れと。ことはやすらかならす聞え侍れは。同程には侍らん。

①従三位——従三位家衡(内)

家衡卿(熊)

②をのか——「を」おのか(河)

③おしむ——「お」をしむ(河)

④鳴也——鳴るは(河)

⑤をのか——「を」おのか(河)

⑥ やすらかならす——やすからす(彰1・彰2・内)

やすらか「に」ならす(賀)

⑦ 聞え侍れは——きこゆれは(彰1・彰2・内)

⑧ には——にや(彰1・彰2・内・賀・山・河・宮・中・白・

刈・神・大・宇・佐・北・久・熊)

十番

左

たのむ^②

家隆朝臣

野^①へは今虫の音たゆむ初霜に聲ものこさすうつ衣かな

右勝

まつ虫の^⑥

俊成卿女

のまつ虫も^{④⑤}

きえわふるは^⑧

うらむなり今は嵐をまつ虫もかれの露にきくわふるねに^③

むしのねたゆむはつ霜に聲ものこさすといへる歌のさま^⑩

いとよろしくは侍を。音とこゑとは。なを同心にやあるへ^⑪

き。又ことに擣衣をよめるにや侍へき。おほかたのすかた^⑫

ことはは。まことにいうにきこえ侍れと。題の心。右はう^⑬

るはしきにつきて。勝と申へくや。^⑭

① 野へは——野へはへ右横ニ「壬二中」トアリ(河)

② (熊)

③ うらむなり——うらむなり(右横ニ「家集なし」トアリ)(河)

④ (彰1・彰2・内)

⑤ (彰1・彰2・内・賀・山・河・熊)

⑥ (宮・中・白・刈・神・大・宇・佐・北・久)

⑦ 露に——露の(彰1・彰2・内)

⑧ (彰2・内・賀・山・宮・中・白・刈・神・大・宇・佐・北・久・熊)

⑨ (河)

⑩ ね——音に(彰1・内)

⑪ 歌の——歌(熊)

⑫ 「音とあるへき」の十六字欠脱(彰1・彰2・内)

⑬ 擣——うつ(彰1・彰2)

⑭ にや——かたや(彰1・彰2・内・宮・中・白・刈・神・大・宇・佐・北・久・熊)

⑮ 侍へき——「は」侍歟るへき(彰1)

⑯ まことに——不明(ことに(彰2)

⑰ いう——「い」ゆう(河)

ゆう(宮・中・白・刈・神・大・宇・佐・北・久)

優(内・熊)

⑱ 心——心は(内)

⑲ 右は——は(彰1)

ナシ(彰2・内)

⑳ つきて——つきてあらしの松虫(彰2)

つきて〈右横ニ「右か」トアリ〉(河)

十一番

左勝

範宗朝臣

② すすのはらのゝ

①の原野ノイ
末野のはらの

長月やすゑのゝ原の色よりもなをかれまさる虫の聲哉

右

為家

③ 初霜のをくのゝ小篠うらみてもをのれ枯行松むしのこゑ

④ 左歌心ことはかなひて。よろしくこそ侍めれ。右歌をくの

ゝをさゝといへる。きゝなれぬやうには侍れと。たゝはつ

⑩ 霜のをくよしをよめるにそ侍へき。末のゝ原は猶いひしり

⑫ てみえ侍れは。以レ左為レ勝。

① (宮・中・白・神・大・宇・佐・北・熊)

② (賀・山)

③ 「新千秋 伏見院 初霜のおかへの真葛うらみかねおのれ

かれゆく虫の声かな」ト頭注アリ(河)

④ をく——おく(彰1・彰2・内)

⑤ をのれ——「を」おのれ(河)

⑥ こそ侍めれ——こそ侍れ(彰1)

きこえ侍れ(彰2・内)

⑦ をく——おく(彰1・彰2)

「を」おく(河)

⑧ やうには——やうに(彰1・彰2・内・宮・中・白・刈・神

・大・宇・佐・北・久)

⑨ 侍れと——侍れは(宮・中・白・刈・神・大・宇・佐・北・

久)

⑩ をく——ナシ(彰1・彰2・内)

「を」おく(河)

⑪ よしを——よしと(彰1)

⑫ みえ——ナシ(彰1・彰2・内)

十二番

左勝

行

能

秋風

松虫

松風

風イ

① 虫の音もつきせぬ御代をたのむらし露は夜寒の野への松虫

② と

光

家

③ 右

④ すゝ虫の聲はいとゝややはの霜ふるのゝをさゝたへぬ嵐に

⑤ 虫の聲夜半の霜のこと。七番の右の歌のおなし心に侍へし。

すゝむしのふりたることも。めつらしからす侍れは。つき
せぬ御代なと祝言に侍めれ。^⑬ 勝侍へし。

①「前に音と聲とは同事と難せられしに虫の音といひ松むし
いはん事如何」ト頭注アリ(河)

②(彰1・彰2)

③(彰1・彰2・内・宮・中・白・刈・神・大・宇・佐・北・
熊)

④(賀・山・河)

⑤(久)

⑥右——右勝(河)

⑦(彰1・彰2・内)

⑧たへぬ——たえぬ(彰1・内・賀・山・河)

た「た」へぬ(彰2)

⑨聲——ナシ(彰1・彰2・内)

⑩霜のこと——霜こと(彰2)

⑪右——左(彰1・彰2)

⑫ことも——ことはも(彰1・彰2・内)

⑬侍めれ——侍めれは(彰1・彰2・内)

侍めり(宮・中・白・刈・神・大・宇・佐・北・
久・熊)

十三番 寄風雑

左勝

女房

龍田河なかれも行か紅葉々のちらぬかけをも風にまかせて

右

雅經朝臣
と^③

つくはねのこのもかのもの嵐にも君か御かけを猶や頼まん^②

左心すかたいとよろしくは侍を。秋の歌にやすしききな^{④⑤}
され侍らん。右歌のさまもいうに。心もあはれに侍るを。^{⑦⑧}

つくはねのこのもかのもの君か御かけ三句をき所。たゝかけ^⑩
はあれとますかけはなしといふ二句はかりやかはりて侍ら^{⑪⑫}

あたらし^⑬

ん。古歌を本とすれと。三句おなし所にをかは。あたらし^⑭

き^⑮ し歌のこゝろいくはくならずとかや。そのかみ老父申旨侍^⑯

き。猶以レ左為レ勝。

①龍田河——龍田川(彰1・内・刈)

たつた川(河)

立田川(宮・中・白・神・大・宇・佐・北・久・

熊)

②「古今 つくはねのこのもかのものにかけはあれと君か御かけ
にます陰はなし」ト頭注アリ(河)

③ (彰1・彰2)

④ 左——左歌(宮・中・白・刈・神・大・宇・佐・北・久)

⑤ すかた——ことは(彰1・彰2・内)

⑥ すこし——ナシ(熊)

⑦ 右歌の——右歌(宮・中・白・刈・神・大・宇・佐・北・久

・熊)

⑧ いう——「い」ゆう(河)

ゆう(宮・中・白・刈・神・大・宇・佐・北・久)

優(内・熊)

⑨ あはれ——あわれ(山)

⑩ をき——「を」おき(河)

⑪ 二句——ナシ(河)

⑫ はかりや——はかりにや(彰1・彰2・内)

⑬ すれと——すれは(宮・中・白・刈・神・大・宇・佐・北・

久)

⑭ をかは——〈不明〉は(彰2)

「を」おかは(河)

⑮ (彰1・彰2・内・賀・山・宮・中・白・刈・神・大・宇・

佐・北・久・熊)

⑯ 歌の——歌(彰1・彰2・内)

⑰ こゝろ——心「を」(賀)

⑱ ならす——ならむ(宮・中・白・刈・神・大・宇・佐・北・

久)

⑲ 侍き——侍り(宮・中・白・刈・神・大・宇・佐・北・久)

十四番

左勝

大蔵卿

や②

長月のかさなる雲のかよひちに行末とをき秋風そふく③

右

侍④ 従

飛鳥川今はふるさと吹風の身はいたつらに秋そかなしき⑤

長月⑨

⑦ 左かさなる雲によせて閏月をそへたる。心たくみに詞いひ

しりて。いとよろしく侍うへに。⑩ 右いたつらにふりはつる

身かなしめるよりほかに。⑬ 心詞のおかしき所も侍らねは。

返々以レ左為レ勝。

① 大蔵卿——大蔵卿有家(内)

有家卿(熊)

② (彰1・彰2・内)

③ とをき——と「を」ほき(河)

④ 侍従——侍従定家(内)

定家卿(熊)

⑤ 飛鳥川——飛鳥河(彰2)

あすか川〈右横ニ「拾遺下」トアリ〉(河)

⑥風の——風〔も〕の・(賀)

⑦左——ナシ(彰1・彰2・内)

⑧「閏月くいひしりて」十八字欠脱(久)

⑨(彰1・彰2・内・賀・山・河・宮・中・白・刈・神・大・宇・佐・北・熊)

⑩いと——ナシ(彰1・彰2・内)

⑪うへに——ナシ(彰2)

うへきに〈き〉ノ右横ニ「本ノ」トアリ(内)

⑫右——ナシ(彰2・内)

⑬身——身を(宮・中・白・刈・神・大・宇・佐・北・久・熊)

⑭かなしめる——ナシ(彰2)

しつかより〈より〉ノ右横ニ「本ノマ」

トアリ(内)

かなしめり(河)

かなしへる(熊)

⑮ほかに——なし(彰2)

⑯おかしき——をかしき(賀・山・熊)

十五番

左持^①

従三位

そよやいかに幾よに成ぬ神風やいせの浜萩とはこたへよ

右

經通朝臣

いく千世と思ひもわかぬ秋かせにをのれそなる住吉の松^④

伊勢の浜萩のいくよ。住吉の松の幾千世。左とは^⑤。

右な^⑥のる。いくはくのをとりまさりみえ侍らぬにや。^⑦

①左持——左(河)

②従三位——従三位家衡(内)

家衡卿(熊)

③千世——千代(彰1・内・宮・中・白・刈・神・大・宇・佐・北・久)

④をのれ——〔を〕おのれ(河)

⑤浜萩の——浜萩(彰1・彰2・内)

⑥千世——千代(彰1・彰2・内・賀・山・宮・中・白・刈・神・大・宇・佐・北・久)

⑦左——左は(彰1・彰2・内)

⑧とは——問(彰1・彰2・内)

⑨右——右は(彰1・彰2・内)

⑩をとり——おとり(宮・中・白・刈・神・大・宇・佐・北・久)

とひ(賀・山・熊)

たとひ(内)

⑪をとり——おとり(宮・中・白・刈・神・大・宇・佐・北・久)

⑫をとり——おとり(河)

⑪ みえ——ナシ(彰2・内)

⑫ 侍らぬにや——侍りぬるや(彰1・彰2・内)

侍るらぬや(宮・中・白・刈・神・大・宇・
佐・北)

十六番

左持

家隆朝臣

かせ^④

我^①よはひ君^②のやちよにふく風の契かそへよ歌のうら浪^③

右

俊成卿女

なかき夜^⑤の夢をもさませ露ふかきさゝの庵^⑥のしたは吹かせ
この両首。又よろしき持に侍へし。

① 我よはひ——我よはひへ右横ニ「壬二下」トアリ(河)

② 君の——君か(河)

③ やちよに——やちよ「に」を(河)

④ (彰2)

⑤ なかき夜——なかきよへ右横ニ「家集なし」トアリ(河)

⑥ したは吹かせ——したはなかせへ「はな」ノ横ニ「脱字」ト

アリ(河)

十七番

左持

範宗朝臣

①

しるへせよ我言のには吹風もきこゆはかりにすみよしの松

右

為家

松^②にいたらぬ

山おろしによその木葉は散はてゝ松にはたえぬ夕しくれ哉

此番も猶いくはくの勝負みえ侍らす。右歌たゝ山風とて侍

なん。

① (彰1・彰2・内)

② (彰1・彰2・内)

③ も——ナシ(彰1・彰2)

④ みえ侍らす——みえ「ぬ」侍らす(久)

⑤ とて——と(彰1・彰2)

⑥ 侍なん——侍らん(彰1・内)

侍らんか(彰2)

十八番

左持

行能

え^①

なきまさり

風たゝぬ御代のしるへはしら浪の岩うつ聲もなきさなり

右

光家

行末もたのみそわたる天津風のときき御代の雲のかけはし

両首の御代風しつかなる心。^③又おなしさまにみえ侍めれ^④
は。^⑤しゐてわきまへ申かたくや侍らむ。^⑥

① (河)

② (彰1・彰2・内)

③ 風——の (彰1・彰2)

④ 心——心まで (内)

⑤ 又——ナシ (内)

⑥ 侍めれは——侍れは (河)

⑦ しゐて——しひて (河)

〔付記〕 本稿は、広島女学院大学学術研究助成（一九九四年度）によるものである。

Collation of the “Dairi Utaawase” Texts of Intercalary
September 19, 1213

Shigeki SATO

Abstract

This is collation of the “Dairi Utaawase” (Imperial Palace Poetry Composition Contest) (Intercalary September 19, 1213) contained in the Gunsho Ruiju using the 17 versions in the possession of the National Institute of Japanese Literature. There are of course some small differences, but it was possible to amend the “atarakishi” in the thirteenth criticism to “atarashiki.” With regard to the differences among waka poems, it seems there are fundamental problems in the “toyama no oku mo” and “toyama no oku no” in right’s poem in the first round, as well as the “kikiwafuru” and “kiewafuru” in right’s poem in the tenth round.